様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２３０５
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１３２２２

研究課題名（和文）小学生における英語の読み書きのつまずきに対する学習支援方法の検討と評価課題の開発

研究課題名（英文）Investigation of learning support methods and development of evaluation tasks for English reading and writing difficulties in elementary school students.

研究代表者
村田　美和（MURATA, Miwa）

高崎健康福祉大学・人間発達学部・講師

研究者番号：００７５６３３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：近年、日本語での読み書きの困難さがないにも関わらず英語において読み書きでつまずく中学生の実態が明らかにされてきている。令和２年より、小学校で英語教育が必修化されたことに伴い、本研究では、小学生の英語の読み書きのつまずきについての実態把握を丹念に行い、その実態を明らかにした。そのうえで、個々の認知特性を評価しその特性に合った学習支援方法について検討した。また、小学生の英語の読み書きの困難さを評価するための評価課題を開発し、簡易且つ的確に未学習との切り分けを行い、適切な英語学習支援につなげられるよう検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
英語学習に関しては、第二言語習得という学問の中で、記憶や音韻符号化、メンタルレキシコンやチャンキングといった様々な視点から、学習方法について議論が蓄積されてきている。しかし、学習障害という視点はこれまであまり着目されておらず、特に小学生においては議論も乏しい。申請者は学習障害の専門家としての立場から、小学校英語学習について一般的な学習方法では定着しない児童がいるということを明らかにしようとしており、それを、個々の背景となる認知特性を絡めて評価や学習方法について科学的に検討していくという点は本研究の独創的な点であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In recent years, it has become clear that junior high school students stumble in reading and writing English even though they have no difficulty reading and writing in Japanese. With the introduction of compulsory English language education in elementary schools in 2020, this study carefully ascertained the actual situation of elementary school students who stumble in reading and writing in English, and clarified the actual situation. We then assessed the cognitive characteristics of each student and examined learning support methods suited to those characteristics. In addition, we developed an assessment task to evaluate elementary school students' difficulties in reading and writing English, and examined ways to easily and accurately separate the unlearned from the learned and to provide appropriate support for English learning.

研究分野：特別支援教育

キーワード：学習障害　英語　読み書き　評価　小学生

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

令和 2 年度からの次期学習指導要領において、小学校において英語が教科化されることが検討されていることに先立ち、平成 30 年度から新しい教科書が先行して導入されるようになる（平成 28 年文部科学省）。これまでの小学校英語では、「聞く」「話す」ことが中心であったのに対し、今後、高学年において教科書を使った「読む」「書く」も含まれるようになり、またそれが評価の対象となってくる。 村田ら（2013）は，中学校の通常学級において，英語の読み書きに何等かの困難さを抱えている生徒は 16.3%いることを示している（図１）。特に、学習障害のある生徒の場合は，第二外国語としての英語学習に困難が生じることが海外で既に多く報告されている（Chung & Ho, 2010 ; Helland & Kaasa, 2005）。また、日本では学習面において著しい困難を示す児童生徒の割合は4.5%と報告されているが、英語圏における学習障害の発症率は、17%にものぼるとも言われている（Shaywitz,1998）。さらに、日本語と英語のバイリンガルの生徒で，日本語では読み書き障害の症状がなく，英語にのみ読み書きの困難が生じたという事例も報告（Wydell & Butterworth，1999）されていることから，日本語に特に困難さのなかった児童でも、英語の読み書きには困難さが生じる可能性が考えられ、その児童数は決して無視することのできない人数にのぼることが予想される。 英語学習に困難を示した中学生の事例に関しては、蔦森・宇野・春原他（2009）や、佐藤・熊谷（2016）、村田（2017）が報告しており、その件数は少しずつ増え、実態は明らかになりつつある。これらの報告から、英語の読み書きの困難さは努力不足ではなく認知特性によるものであることは明らかになってきている。 ただ一方で、小学生が英語の読み書きを学んだ時に、どのようにつまずくのかについては、教科化されていない現在は未知数であり、つまずきが勉強不足によるものか、あるいは認知特性によるものかを判断できる評価課題はなく、それらは英語の教科として読み書きが導入された後の検討課題となっている。 英語の読み書きの困難さが、認知特性によるものだった場合、その認知特性に合わせた学習方法が必要であると考えられる。特に小学生の場合、認知機能もまだ発達途上であるため、指導方法によっては大きく伸びる可能性も期待できる。

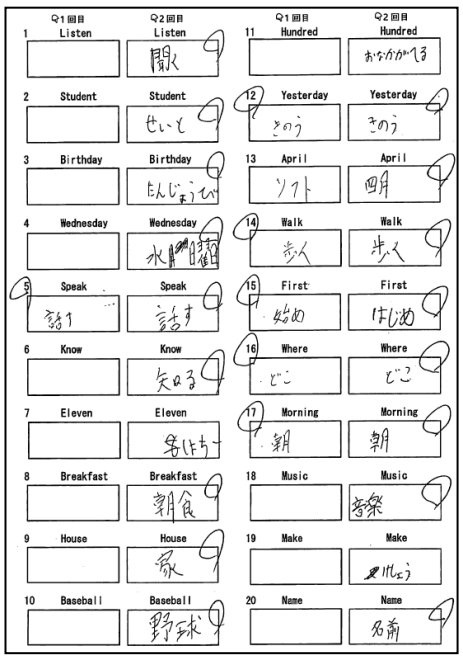

図1　英語の読みに特異的な困難さがあり自力で読める単語が少ない（各左）が、音声を聞けば回答できる（各右）中学生徒の解答の様子

２．研究の目的

本研究では、１.に挙げた問題に対して、まず小学生の英語の読み書きのつまずきについての実態を把握していく。そして、個々の認知特性を評価し、その特性に合った学習支援方法の検討することで、小学生の英語の読み書きの困難さを的確に評価するための評価課題を開発することを目的とする。

３．研究の方法

公立の小学校２校に在籍する児童生徒に対して、本研究を実施した。また、その中で英語の読み書きにつまずいている小学生の特性について更に評価し、その状態について検討した。さらに、小学生の英語学習初期段階での読み書きの困難さの要因が、勉強不足によるものか、認知特性からくるのかについて判断するために、日本語の書字速度等を併せた分析も行った。

アルファベットの読み書き、ローマ字の読み書き、漢字の読み書きについて、評価課題を作成し、実施した。またＵＲＡＷＳＳⅡを用いて日本語の書字速度を計測し、日本語との関連について分析した。またＧＩＧＡスクール構想の端末における、書字に代わる文字入力の様子についても、併せて評価した。

困難さのある児童のデジタル教科書を用いる様子を観察した。

４．研究成果

５～６年生 122 名のアルファベットの書きに着目し、アルファベットの書きが学年平均－1.5SD 未満の児童を抽出した。抽出された 13 名の児童の内、各項目の延べ人数を見ると、６名が、漢字の書きにおいても－1.5SD 未満の成績であった。また６名がローマ字の習得においても－1.5SD 未満の成績であった。また、書字速度が－1.5SD だった児童が２名、他に何も－1.5SD の課題がなかった児童が２名という結果であった。アルファベットの書きに関しては、漢字の書き

及びローマ字の読み書きとの相関が有意に高く、一方で書字速度に関しては、相関が低く、書字速度に関しては、音韻に起因するアルファベットと異なる要素を含む可能性が示唆された。

本研究結果より、英語の読み書きでつまずきのある児童生徒は、通常学級の中にも在籍していることが明らかになった。またその背景として、日本語との関連からも、そのつまずきは努力不足によるものではなく、認知特性によるものである可能性も示唆された。また、漢字のつまずきは、アルファベットの書きと高い相関があったため、漢字の書字のつまずきが、アルファベットの書きのつまずきを予測するための一つの指標となる可能性が示唆された。また、ローマ字や書字速度など、既に獲得している日本語の読み書きと併せて評価することで、英語のつまずきの可能性について、予測できる可能性が示唆された。

また、彼らが今後円滑に学習していくための手立てとして、現在、全国の小中学校に配布されている、学習者用デジタル教科書は、大きな助けになる様子が垣間見られた。これまで、教科書の英語を読むことが困難であった児童生徒が、デジタル教科書の音声化により、自力で読み進めることが出来るようになってきていること、また、綴りの困難さについても、タイピングにより補なわれてきている様子が明らかになった。一方で、アルファベットの書きや、ローマ字の書きについては、一定数の児童生徒が困難さを示していたことから、例えば教科のノートテイクなどを、全て、丁寧な指導をせずにローマ字タイピングに置き換えてしまうと、これまで以上に困難さを感じる児童生徒が増加する可能性も見えてきた。ローマ字タイピングを導入する場合は、丁寧な指導を経てから導入するなど、困難さのある児童生徒の存在を意識して進める必要性も示唆された。

本研究で開発した評価課題を、論文や教材としてまとめ、多くの人に配布できる形にして社会に還元していきたいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 村田美和、巖淵守	４．巻 30
２．論文標題 中学生の英語学習におけるICT端末による読み書きの代替	５．発行年 2021年
３．雑誌名 LD研究	６．最初と最後の頁 314-320
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 村田美和	４．巻 78
２．論文標題 中学校通常の学級における英語・数学・国語の指導法と支援の工夫について	５．発行年 2020年
３．雑誌名 特別支援教育	６．最初と最後の頁 54-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 村田　美和	４．巻 47
２．論文標題 読み書きが苦手な小中学生に対するICTを活用した英語の授業	５．発行年 2019年
３．雑誌名 実践障害児教育	６．最初と最後の頁 609
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 村田美和
２．発表標題 ICT導入に伴う「書き」の在り方の変化について
３．学会等名 LD学会第30回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 村田美和、和田拓、千葉千恵美
２．発表標題 大学の相談機関における学習障害の子どもにむけた親支援と地域の役割について
３．学会等名 日本家族療法学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 村田美和
２．発表標題 英語の読み書きとiPadの活用について
３．学会等名 英語教育ユニバーサルデザイン研究学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 村田美和　飯島睦美　村上加代子　山野有紀　小泉健輔　菅野陽太郎
２．発表標題 中学校通常学級における学習に難しさのある生徒に対する授業の工夫と支援
３．学会等名 日本LD学会第28回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 村田美和　菅野陽太郎　関直子
２．発表標題 中学校通常学級における作文指導ーツールとゴールを自分で選択するー
３．学会等名 日本LD学会第28回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Chiemi Chiba, Miwa Murata & Hiraku Wada
２．発表標題 Support for LD children and familes : Japanese case
３．学会等名 IFTA2020（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 飯島睦美、村田美和
２．発表標題 中学校2年生での英語学習のつまずきを探る－音韻認識と文法的センスからー
３．学会等名 全国英語教育学会第44回京都研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 村田美和
２．発表標題 英語の読みと綴りにつまずきのある中学生に対するICTを活用した指導
３．学会等名 日本LD学会第27回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 村田美和
２．発表標題 読み書きの苦手な児童生徒の教育版マインクラフトプログラミング学習教材の活用について
３．学会等名 日本LD学会第27回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関